第６回 第２次瀬戸市教育アクションプラン推進会議
議 事 録

日　時：平成 30 年 2 月 22 日（目）午後 3 時から午後 4 時 35 分まで
場　所：瀬戸市役所 4 階大会議室
出席者：
＜会長＞上川 和子
＜副会長＞吉田 淳
＜委員＞一尾 茂疋、加藤 髙明、河路 久、田中 直美、西原 勇、深見 和博、服部 智志、福岡 明、福田 直美、福留 正康、舩坂 礼子（５０音順）
＜オブザーバー＞田口 浩一（交流学び課長）、藤井 邦彦（交流活力部次長兼地域活動支援室長）
＜事務局＞涌井　康宣（教育部長）、松崎　太郎（学校教育課長）、中桐　淳美（図書館長兼視聴覚ライブラリー館長）、早川　寿（学校教育課主幹）、阪本　有一（学校教育課主幹）、加藤　淳（学校教育課専門員兼指導係長兼指導主事）、深谷 大輔（学校教育課専門員兼指導主事）、清水 隆之（学校教育課企画係長）、水野　華（学校教育課主事）

議事録：

1 会長挨拶

今の話題はというとやはりオリンピックでもちきりだが、勝ち負けだけでなく、努力は報われることや、仲間と一緒に何かを作り上げる素晴らしさが画面から伝わってきて、連日声を枯らして応援をしている。子どもたちは１年の終わりに当たり、落ち着いて学校で勉強していることでしょうし、先日公民館大会に参加し、いろいろな方々が参加をしているのを見て、感銘を覚えた。瀬戸市でも、自分の知らないところで、いろいろな場所で、いろいろな方が日々研鑽を積み、努力を重ね、いろいろな成果を上げていることと思う。オリンピックを見ながら、対外的に称賛される方々だけでなく、小さなことで「できてよかった」といえるような環境でありたいし、小さなことで喜び合える社会や地域でありたいと感じた。本日は報告事項としてなかなか重みのあるものが並んでおり、また協議事項としても小中一貫校カリキュラム編成及びキャリア教育等についてがあげられている。プロジェクターが用意してある通り、後半２０分ほどの説明の後協議となる。意見をいただく時間が少し短くなってしまうが、ここに来ていただいた皆様の声を一人ずつ届けていただきたいと思っている。

2 報告事項

(1) 瀬戸市行政組織の改編について

(2) 平成 30 年度当初予算の概要について

(3) 瀬戸市教育創造基金条例の制定について

学校教育課長より、資料に基づき概要説明。

○委員

予算に関連して、教科書の大きさが A4 サイズに変更されるのに伴って、机の天板のサイズも新しい規格に変わってもうすぐ 20 年だが、現在、新 JIS 規格の机を使っている学校はどのくらいあるか。

○事務局

小中合わせて 28 校全て新 JIS 規格の机になっている。特別支援学校についても、新 JIS 規格の机と、子どもたちに合わせた特注の机を使用している。

(4) 校区外通学に係る特定地域並びに小規模特認校の設定に向けた方針について

学校教育課長より、資料に基づき概要説明。

(5) 瀬戸市小中一貫校の校名候補の選定結果について

学校教育課長より、別添資料(資料番号 2-1)に基づき概要説明。

(6) 第 3 回瀬戸市小中一貫校開校準備委員会結果について

学校教育課長より、別添資料に基づき概要説明。

○委員

校区外通学の表記に関する意見だが、4(2)「市役所での転入…」と書かれているが、「市役所での」は必要ないのではないかと感じた。「転入及び転居の手続き時に、市教委に申請書を提出…」の方がわかりやすいのではと感じた。

3 協議事項

(1) 小中一貫校カリキュラム編成及びキャリア教育等について

深谷指導主事・西原委員より、資料及び別添資料(資料番号 2-1)に基づき概要説明。

○委員

カリキュラム中間報告の「自ら学ぶ力」の欄にある、英語力について、私は英語教育自体には賛成だが、英語教育の研究者の中には「帝国主義の文化バージョン」

として「英語帝国主義」を述べる方もおり、私自身の教員生活の反省も含めて、瀬戸での英語教育が「英語帝国主義」を担う子どもを育てる事は避けたいと思っている。英語教育が、これまでの日本の社会を作ってきた過程でどのような役割をして来たのか、その功罪を常に考えながら、振り返りながら英語教育に取り組むことで、瀬戸の教育理念にそった英語教育を推進できたらと思っている。

次に「新たな取組」という記載について、これは誤解に繋がるのではと心配している。「新たな」と書くことで、これまでは取り組んで来なかったと受け取られてしまう。しかし、実際はそうではないことが多くあって、小中一貫校でないその他の学校の教員たちを地域や保護者の方が見たときに「うちの学校はやっていないのか」と思われてしまう。せっかく瀬戸市教委が中心となって一生懸命取り組んできたことを、そうではないと受け取られてしまうことは、私としては心外である。例えば教科担任制について、今各小学校で、学級担任を持っていない教員が授業を行うことはあるので、実態が伝わるような表記であるとよいと思っているので、検討いただきたい。

また、用紙右側の「確かな学力の向上」の③と④について、かなり具体的な方策まで示しているが、もしも私が校長だったら、学校の中のことは学校に任せてほしい。市教委とは相談するとは思うが、「なぜ口出しをするんだ」という気持ちを持ちながらやる可能性がある。私が本山中学校に転勤した際、1学期の中間テストはやっていなかった。学校の実情もあるし、テストの時期について学校内で教員同士で相談するため、指針は必要だと思うが、あまり具体的に示さない方がいいのではと感じている。

これまで何回か申し上げたことだが、名詞としての「とりくみ」の表記について、ここでは「取組」となっているが、アクションプランでは、「取り組み」を使っている。担当課長が不在の中の発言で申し訳ないが、「子ども・子育て支援計画」や「地域福祉計画・地域福祉活動計画」では、「取組み」となっている。できれば、市役所内で統一していただければと思う。国や県は「取組」としているので、それを含めてどうするか、それぞれの課の事業の理念もあるかと思うが、検討していただきたい。

〇会長

小中一貫校で集まる7校の中には、現在ニュージーランドやオーストラリアと交流をしている学校がある。海外へ行った子ども、海外の子を受け入れた子ども、海外の子と仲良くなった子どもは、いろいろな国へ関心を持ち、理解を深め、進路を決める時海外の大学に行ったり、学校を卒業した後も外資系の企業へ進んで外国人と交流したりと、目には見えないものの、大きな成果を生んでいる。小中一貫校で

はそういった海外交流はどのように引き継がれていくのか。

○事務局

国際交流事業については、特色ある事業であり、子どもたちはもちろん教員にとっても得る物が大きいと聞いている。ここには英語教育、とあるが、この国際交流事業もできる限り継続させていきたい。

○会長

子どもたちはパソコンを使うのが上手なので、家にいても学校にいても海外と画面を通して交流していけると思う。ただ海外へ行く・海外から受け入れるだけでなく、年間を通して、常日頃から交流をすることで、英語教育に繋がっていくといいと思う。いままで祖東中学校のニュージーランドクラブで世話役をやっているので、今の交流が小中一貫校でも継続されることを強く願っている。

○委員

「世界に通用する英語力の習得」について、どういう状態になったら「世界に通用する」という判断になるのか。小学校低学年の英語学習は独自の教育課程だと思うが、中学校ではどこまで独自の教育課程を進めると考えているか。また、今のカリキュラムも系統的なカリキュラムだと思うが、ここでいう「系統的」とは何がどう系統的なのか。

○事務局

「世界に通用する英語力」については、これから検討していく。ただ話せる、聞けることだけが国際性豊かな英語力を持った人間ではないと考えている。英語教育だけの守備範囲ではなくなるかもしれないが、人との関わり方であったり、１つのツールとして英語が使えること、異文化を理解しているというようなことが該当してくると考えている。具体的にといわれるとなかなか難しいが、皆様に理解していただける形で検討していきたい。

「系統的」について、まず 1～9 年生までというのが 1 つ特色ある部分である。新学習指導要領では、3 年生からの外国語活動、5 年生からの外国語科となっており、1～2 年生は教育課程を組まなくてもいいが、先生方の力をお借りして、1～2 年生に関しても教育課程を組み、英語教育を実践しようとしている。もう 1 つポイントとなるのが小学校と中学校の連携である。おっしゃる通り、教育課程というのは系統だって連続性を持って作られているが、中学校の教員が小学校でどのような英語を教えてられてきているかを知らなかったり、その逆もある。そういうところから、

それらを理解し、教育課程の中で見える化を図り、この授業が中学校の授業のどこに繋がっていくのか、また中学校の授業が小学校の授業のどこから繋がってきたのか、教員たちや保護者の皆様にも見えるようにして、1～9 年生までを繋げていく形で整理をする予定である。

○副会長

私は大学の教員なので、今まで外国語を使って様々な交流をしてきた。そこで 1 番感じるのは、何か考えていても、そのことを人前で言う・話をすることになかなか繋がらない。自分が人の話を聞くことができても、自分の意見が言えるかどうか、そこが世界に通用するかの問題であると感じる。はっきり言うと、英語は手段であり、むしろ人間性というか、個人が何を主張したいのか、何と考えていきたいのか、何を伝えることで自分を表現していくのかということを考えていかないと、今の英語教育では表現する、主張する、意見を聞き入れようとする、という点がどうしても弱い。私は理科教育という分野であるが、自分なりの考えを持っていくというプロセスの中でそういうものができたので、小学校の段階で、ある程度個性豊かな、自分の意見を持てる・話ができることが大切で、手段としての英語を使えることが世界に通用する英語に繋がってくると思う。前提は自分の中に何があるか、何を主張したいのか、何を受け入れたいのかということで、それがないと、受け身的な教育になってしまうと考えている。大きな意味で、人間教育を進めるということが大前提での、英語教育が必要である。

○委員

外部の方にお願いするのではなく、教員の方々が 1～2 年生に英語を教えるのか。その場合、どうやって教えるスキルを身につけるのか。

○事務局

授業という枠組の中では、小学校も中学校も教員が英語を教えていく。その中で ALT が授業の場にいるとか、もしくは小学校にも英語専科の教員がいるが、英語を専門とする免許を持った教員が教えるとか、小学校なら担任が教えるとか、いろいろな立場・役割の中で、授業の中で英語を教えていく。授業以外（国際交流）では、たとえば海外の生徒や、英語を話せる地域の方との関わりの中で、教員以外と英語に関わる空間があると、それも子どもたちが学ぶ対象になるので、授業という枠組みの中では教員が教えるが、いろいろな関わりの中で国際性を学ぶ機会ができればと思っている。

教員に対する指導は、研修を様々やっており、例えば昨年度は ALT を派遣してい

る会社にお願いをして、夏休みに学校に来てもらって、教員を対象に授業で使う英語を教えてもらった。今後も新学指導要領の実施に向けて様々な研修を全市的に行っていく。

○会長

教員の方々も学ぶことが多くて大変である。専門の教科以外も教えている上に、英語も増えるとなるとやはり負担が大きいのではと気になる。副会長が言ったように、自分の中にこれを伝えたい、とか、これを大事にしたい、とかいう思いがなければ日本語も英語も出てこなかったわけで、人を育てていくというところから始めることが大事である。それを 1 つの柱と打ち出して、重点的にやっていく目標を掲げていただいていると思うので、うまくいくことを願うばかりである。

先ほど委員が教科担任制について言われたが、音楽、体育、理科、特に理科の実験は危険も伴うので専門の教員が授業をしているが、それをもっと特化した形になるのか、場合分けをする形になるのか、どうなっていくのか。

○委員

教科担任制について詳細はまだ決まっていない。ほかの地域の小中一貫校でも同じ取組が行われていて、どのようなやり方が最も効果的なのか精選しているところである。私も視察に行くと、必ずしも中学校の教員が小学校で授業をして専門性を活かせるかというと、そうではないということも聞いている。何をすれば成果があるのかしっかり見極めて実践として取り入れていきたい。

○副会長

現在交流があるのがニュージーランドとオーストラリアとのことだが、実は他の近隣国も、実際に行くと小学生でも英語ができる。台湾に行ったときに、小学校高学年の授業の見学に行ったら、小学生に「この授業はどうか」「私の意見はどうだ」と聞かれた。このように、台湾の一般校の小学生でだが、英語はできる。また小学校の校長をしていた時に、韓国へ行ったが、韓国の子たちも英語で話をしていて、それほど定着している。英語を母語としない国の子たちとの交流は、英語でないと交流できないことが多い。ニュージーランドやオーストラリアに限らず、台湾や、中国、香港、東南アジア諸国でも英語教育をしている。英語を母語としない国の子との交流は刺激になると思うので、幅広く交流を推進することが必要であると思う。

○委員

近隣諸国の教育スパンはわからないが、オーストラリアやニュージーランドとの

交流での利点は、時差がないことと、相手の学校が休みの時に日本で授業があり、日本が休みのときは相手の学校で授業があるため、長期休業中に交流すると相手の授業に参加できることである。今副会長の話を聞いていて、近隣諸国との交流でもそういう利点があるといいなと思った。

○副会長

韓国は3月が新学期で、9月から後半の授業が始まり、冬休みが長い。時差もないので、非常によい。熱意をもってやってもらえると思うが、国の事情もあり、すぐにというわけにはいかないかもしれない。それでも、抵抗なくうまくやれるのではと考えている。台湾も時差がないし、非常にやりやすい国である。そういった意味で、近隣諸国をターゲットにすることはメリットが大きい。コミュニケーション力を育てる意味では、英語を母語としない人同士のほうがコミュニケーションに一生懸命になるので、得る物が大きいと思う。

○会長

ニュージーランドやオーストラリアの英語はなまりが強く、受け入れていても 3日目くらいからやっとわかるくらいである。英語が第二外国語の人の方がきちんとした英語を話すかもしれない。そういったことも加味して、いろいろな可能性に取り組んで、様々な部署の人で協力し合って推進していただくと、子どもたちの英語力も上がると思う。自分の知らない国の子や人と交流していけることは、子どもたちへの自信へ繋がるし、大人になってから新しいことを始める時の一歩を踏み出さないといけない時、その一歩の負担が少し軽減されると思うので、小さいうちから英語をみんなで楽しく話せるように、英語で何か言いたい！と思えるくらいの積極性が持てる子どもになれるような、学校になってほしいと思う。

基礎学力習得テストや、10～15 分のテストなど、子どもたちが慣れないことに直面して大変ではないか、集中して学ぶ時間があるのかと心配する気持ちもあり、始まってみれば流れていくことだとは思うが、うまく知識の定着に役立てばいいと思う。

○委員

一保護者として「体力の向上」について気になっている。自分の子が部活で卓球をしており、1月に行われたダブルス大会の2回戦で、フルセットで負けていたところから逆転し、準優勝した。自分の子以上に、周りのチームメイトが「私も次はそこまでいきたい」と思ったようで、そこで初めてチームが一致団結して、中総体の団体戦頑張ろうという気運となった。自分の子は、意見がなかなか言えない子だっ

たが、団体戦で 1 番に出るなら勝たないといけない、と自信が持てるようになった姿を目の当たりにした。いろいろな子がいて、藤井聡太くんのようにいろいろな世界で活躍する子がいて、子どもの成長に関しても、もちろん早く伸びる子もいるが、いつ伸びるかわからないものである。なので、どこかで子どもが自信を持てるような学校であって、しかも保護者としてそれが見える学校であってほしい。今は PTA の役員もくじ引きであったり、なかなか参加しない保護者も多いが、子どもの輝く姿を見ると保護者も盛り上がるし、相乗効果で学校も盛り上がると思う。

○会長

英語で自信の持てる子もいれば、運動で自信の持てる子もいるし、給食がたくさん食べれることで自信の持てる子もいる。そういう子どもたちを、きちんと見ていてもらえる余裕や、まなざしを持っている方が教員として学校にいてくれることが、親として一番の願いである。

○委員

自治会の副会長が昔卓球をやっていたということで教えてくれることがあり、親でなくて地域の方が教えてくれることは子どもも聞き入れやすいようである。それで勝てると自信に繋がるし、地域に才能のある方はたくさんいるので、教員が部活を見ることができないのであれば、地域の方に入ってもらうと利点は大きいと思う。何か目標がある時は、それに向かって頑張ろうという雰囲気があれば、子供も満足感があると思う。

○委員

3 つの学校に図書ボランティアとして参加している。ゴールデンエイジといわれるのが 10～12 歳で、1 番スポンジのようになんでも吸収できる年齢であり、勉強漬けのようにも見えるが、そのあたりからが、自分が何がしたいかを考えるにはちょうどいいと感じている。5～6 年は読み聞かせから自分読みに移行する時期であり、中学生なると受験に向けて、というスタンスになってしまうので、心を育てる意味では 5～6 年生が一番伸びる時期だと考えている。

○委員

学校ボランティアについては地域によって差があるが、年齢・性別関係なく、子どもたちのために、と支え、協力いただいている。地域が新しいと温度差があったり、全てがすべてどの学校もボランティアがうまく機能しているかというと、100%そうではない。でもそれは仕方ないことである。自分の学校は図書ボランティアさ

んに熱心に子どもたちに関わっていただいていて、子どもたちも楽しみにしているし、学校側としても活動がありがたい。一番期待することは活字・文字を好きになることであり、やはり言葉遣いへの効果である。言葉遣いがより改善できれば暴言が減る、暴言が減ればいじめがなくなる。そのように物事を繋げて考えていただいて、取り組んでいただけたらと思う。また、例えばミシンの授業で、新任の男の教員が困っていた時に、お母さん方に授業へ入ってもらうこともボランティアの 1 つではないかと思う。そういう切り口から、保護者の方にお手伝いをしていただくのも 1 つの考えだとおもう。

○委員

PTA 役員の方が読み聞かせをしていただいている。子どもが卒業して PTA が終わってしまっても、そのままボランティアとして残っていただいていて、ありがたいことである。地域の方も交通ボランティアとして自主的に活動していただいているし、最近だと防災教育を地域の人を入れてやっていこうという動きもあり、学校として協力できることを協力していこうと話している。

○委員

特別支援学級に図書ボランティアに入っていただいている。また、ボランティアといえるかわからないが、柔道部、剣道部、オーケストラ部に外部講師の方に入っていただいている。それを見ていると、普段顔見知りの教員から指導を受けるよりも、外部から専門的な指導があることで子どもたちの伸びが違うことを実感する。そういう意味で、いろいろなところで地域の方が入ることがプラスに働くことを実感している。

○会長

小中一貫校は学区が広い。どのようにボランティアの方集めるというか、お声掛けして入ってもらうか、地域ごとに準備していることかと思う。これからあがってくる意見をじっくり検討していただいて、誰もが気軽に参加できるよう、直接学校と話して、みんなで盛り上げていけることを願っている。私は祖東中に図書ボランティアとして月 1 回行っていて、祖東学区の図書ボランティアの方たちとも代替繋がっている。ボランティアの皆さんは、新しい学校にもぜひ呼んでもらいたい、と、お声掛けがあるのを待っている状態で、学校が落ち着いたらすぐにでも読んでいただきたいと思っている。道泉の図書ボランティアの方とも繋がっていて、小中一貫校でも盛り上げていこうねと話している。草刈りや花植えのボランティアの方々も、新しい学校でも今までの活動ができるだろうかと心配している方もたくさんいると

思う。連携の取り方のサポートも考えていただけると、開校時にスムーズにいくと思うので、いろいろな方の声を取り入れていただきたい。

○委員

教育サポートセンターで、地域学校コーディネーターとして業務を行っている。キャリア教育コーディネーターの資格も持っている。豊かな心の育成という点で、英語は手段であるがまず自分の意見を持つという意欲が大切である、ということは見えてきているが、具体的にどうするかということを考えると、瀬戸市は十数年前から地域の方と授業の中で関わっていて、全国でもあまりない珍しく、素晴らしいことで、全国のキャリア教育を推進しているコーディネーターが集まる会でも瀬戸市は大変注目されている。そんな中で新しく小中一貫教育が始まる中で、瀬戸市にはキャリア教育推進協議会という中間サポート部署があり、学校が求めることに対し、講師の紹介を行っている。たとえば今年行ったマナー講座やコミュニケーション講座は、誰でも講師ができるわけではなく、ある程度マニュアルもあり、講師として養成が必要であるので、そういった点で、中間サポート部署があれば、教員の方も安心してお願いができると思う。もう 1 点、ボランティアの方と学校の関係について、図書ボランティア以外にも「私もやりたい」という方もいて、いろいろな方向性があると思うし、子どもも成長すると同時に保護者も成長し、地域が変化する。変化に常に対応するためには学校と地域との一定の信頼関係が必要である。知らない方が学校に入りたいと思った時、なかなか難しい。そういったときに中間サポートの仕組みが必要である。その人が何をするかというと、不安を抱えたボランティア希望の方と、ニーズのある学校の交流と学びの機会を提供し、お互いに安心して関われるような信頼関係を築く機関として、今は教育サポートセンターとしてボランティア研修会を行っている。そういったことを広げ、仕組みとして整っていくと信頼関係も広がっていくと思う。

○委員

学校と地域との関わりということで様々な意見交換が行われた中で、可能性を感じた。カリキュラムの中で 1 ついうと、子どもたちの可能性や創造性を大事にするような ニュアンスがもうすこし入っているといいと感じた。もちろん背景で考えられていることと思うが、個性を大事にして、その子たちのもつ創造性をより豊かにする姿勢が表に出ているとよりいいと思う。

○教育長

いつもこの会議ではエネルギーを貰えるというか、トーンの下がった自分の心を

グッとあげていただいて、中から熱いものを湧き立たせてもらうことができ、今日もいただいた１つ１つの意見に感謝申し上げたい。どんな意見を出していただいても構わない会議であるが、1つ大事なことは、ここでは骨格を整える・ブレないように柱を整えていただいている場であるということである。事務局だけで考えていると薄っぺらくなってしまうところを肉付けしていただけるという点について、今日も数多くの意見をいただけた。ひそかに自分が思っていることとぴったり合う意見もあり、嬉しく思った。いただいた意見の具現化に向けてこれからも取り組んでいきたい。これからも委員の方々とチームワーク良くやっていけるような協議会となっていくことを強く願っている。

○会長

今日は小中一貫校についての協議ということであったが、小中一貫校に限らず、瀬戸で学ぶ全ての子供たちのためにこうだったらいい、こうしたらいい、という協議となったと思う。それを具現化していく過程を皆さんと一緒に見ていけるし、参画できることを非常に幸せに思い、感謝申し上げる。

4　その他

○委員

キャリア教育について、それ自体は大賛成だが、学校教育の中で大人と子どもが出会うということに限界を感じている。特に中学校では、現在の高校や大学の入試制度が変わらない限り難しい。大人のロールモデルとどのように出会いの機会を設けるかという事だと思うが、交流学び課が出している「ライフ・ワークバランス推進宣言募集事業」で、登録事業所が順次公開されており、最終的には家族で過ごす時間を保障していくことに繋がるものだと思っている。それは子どもと大人の出会う機会を学校生活以外でできていくことに繋がるので、キャリア教育の基盤となってくる。限られた授業時間内でキャリア教育を行うのは難しく、教育活動を進めるうえで必要ならば取り入れるが、その見極めが難しかったという思いがある。市の６次総には、縦割り行政をやめ、分野横断型の政策を展開するとあるが、キャリア教育と「ライフ・ワークバランス宣言」はその代表的な例のように思うので、庁内でも進めていただけるといいと感じた。

○委員

ライフワークバランスに関連して、キャリア教育も大切だが、家庭教育も大切である。名古屋へ講師としていくことがあるが、母親向けの講座等が充実している。

調べてみると、そこは瀬戸市の弱いところかなと感じた。学校は学校、家庭は家庭で役割を持つと、相乗効果があるのではと思う。

〇委員

キャリア教育に関連して、瀬戸市に限らないが、社会貢献として参画したい企業は多くあると思う。瀬戸市にどういった企業があるかわからないが、大きな企業はもちろん、小さな企業もやるチャンスを求めると一生懸命考えてくれる。いいものを提供したいという事で、子どものために精選されたものを提供してくれる。各学校から企業にお願いするのは難しいので、市教委から企業へ発信すれば、企業から提案してくれるので、それを見た学校が参加する、ということを繰り返すと、いいものが生まれてくると思う。広い意味で言えば、愛知県全体に声をかけるといろいろなところから声が上がると思うので、門戸を広く開放することを考えるとキャリア教育が充実すると思う。

〇会長

市内にも大学があるし、近隣にも大学があるので、講師として派遣してもらったり、こちらからいったり、いろいろな可能性があると思うので、精査した上で、繋がっていくといいと思う。家庭の場も、やすらぎの場であると同時に、学び続けるのが人であるので、やはり家庭も学びであることが理想だと考える。家庭の力をもっと押し上げるようなことがあればいいと思う。教育サポートセンターの 2 人がいるが、ますます重要な場となってくると思う。いろいろなところで知恵や力を借り、子どもたちの教育の質が高く、温かくなるといいと思う。

・事務局より連絡事項

次回日程は、5 月以降